

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

マイ・ブラザー 哀しみの銃弾

2013年・フランス、アメリカ映画
配給/シヅカ・127分

2014 (平成26) 年7月26日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：ギヨーム・カネ
脚本：ジェームズ・グレイ
出演：クライヴ・オーウェン/ピリー・クラダップ/マリオン・コティヤール/ゾーイ・サルダナ/ミラ・クニス/ジェームズ・カーン/マティアス・スーナールツ/リリ・テイラー/ドメニク・ランバルドツィ/マーク・マホーニー

👁️👁️ みどころ

兄弟の絆を描いた感動作や、逆に兄弟の確執を描いた問題作は多いが、絆と確執の両方をバランスよく描いた映画は珍しい。

子供の頃からワルで前科者の兄と、正義のために働く警官の弟。そんな2人が同居したり、強盗犯VS警官として対決したり……。1人の女をめぐる奪い合いがないのは良かったが、女癖の悪さは父親譲りらしく、共通……。？

展開は何かと忙しいが、いかにもフランス的美学で終わるクライマックスに向けて、兄弟の絆と確執をタップリと……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本作のテーマは、兄弟の絆と確執の両方！■□■

兄弟の絆や、逆に兄弟の確執を描いた映画は多いが、本作はその両方を描いたもの。導入部では、7年ぶりに刑務所から出所してくる殺人犯のクリス（クライヴ・オーウェン）を別れた元妻のモニカ（マリオン・コティヤール）と共に控えめに迎えに来る弟のフランク（ピリー・クラダップ）のシーンが登場する。クリスとフランクの2人は7年ぶりの再会にもかかわらず抱擁も交わさず、互いにちらっと目で挨拶する程度だったから、「こりゃ何かあるな」と思うのが当然。それが、フランス人の俳優でありながら、本作の脚本を共同で書き、1970年代のアメリカを舞台とした本作を監督したギヨーム・カネの狙いだ。

クリスを演じるクライヴ・オーウェンは、『シン・シティ』（05年）（『シネマルーム9』340頁参照）や『シャドー・ダンサー』（11年）（『シネマルーム30』101頁参照）等でお馴染みの顔だが、フランクを演じるピリー・クラダップの顔は私にはよくわからなかった。しかし、本作ではクライヴ・オーウェンもピリー・クラダップも仲が悪いようで

良いようで、でもやっぱり悪い(?)、兄弟の絆と確執の両方を見事に演じている。まずは、本作のそんなテーマに注目！

■前科者の更生は、やっぱり難しい・・・？■

大阪のお好み焼きチェーン店「千房」を一代で築いた代表取締役役の中井政嗣氏は犯罪者の更生に取り組み、出所した前科者の就職受け入れ事業に精を出している。この動きは当初は異端視されていたが、最近は大きな広がりと共に共感を得ているようだ。しかし、それでも全員が成功しているわけではなく、信頼して



© 2013 - copyright : Les Productions du Trésor - Caneo Films

採用してもやっぱり裏切られることも多いらしい。しかし、本作では警官でありながら、殺人の前科者である兄のクリスを自分の家に同居させ、かたぎの仕事を世話しようとするフランクの姿が描かれる。

フランクが紹介したのは、中古車センターの仕事。二度と犯罪に手を染めないと誓ったクリスが昔からの親友マイク（ドメニク・ランバルドツツィ）の手も借りながら、真面目に仕事に精を出そうとしていることはまちがいない。しかし、心ない従業員から差別的な言葉を浴びせられると、つい……。また、この手の男は大体ええかつこしいが多いから、女にはやたら優しく、近くにかわいい女がいたらすぐに手を出すタイプが多い。おっと、それ自体が私の偏見かもしれないが、現にクリスは中古車センターで経理の仕事をしている、かわいい事務員ナタリー（ミラ・クニス）にちょっかいを出すことによって、徐々にややこしくなっていくことに……。

他方、クリスと別れた妻のモニカとの間は、かなり曰く因縁があるようだ。導入部ではそれはよくわからないが、クリスが昔馴染みの悪党ルイス（マーク・マホーニー）の誘いに乗って再び犯罪に手を染め大金を手にとると、モニカを売春宿の女将に据え、2人の仲は「悪事のパートナー」として復活していく。しかし、そんな事業が順調に進むのは、きっと一時だけ。そんな思いで見ていると、案の定……。

■女グセの悪さは、兄弟とも共通・・・？■

クリスが離婚した元妻のモニカは、薬物に手を出したことによって身を持ち崩したらしい。そんなモニカは、今は自分でも売春商売をしているようだから、女としては最悪。他方、フランクは目下独身のようなが、こちらも昔付き合っていたが、今はスカルフォ（マ



© 2013 - copyright : Les Productions du Trésor - Caneo Films

ティアス・スーナールツ) と結婚し、子供ま
でいる女性ヴァネッサ (ゾーイ・サルダナ)
に未練があるらしい。

本作導入部ではフランクがいかにもアメリ
カの警官らしく犯人の家に突入していく姿が
描かれるが、今フランクが逮捕したのはヴァ
ネッサの夫のスカルフオ。そうすると、ヴァ
ネッサが怒るのは当然。だって、フランクは
一方では自分の手でスカルフオを逮捕し刑務

所にぶち込んでおきながら、他方ではスカルフオの妻ヴァネッサとヨリを戻そうとしてい
るのだから、この展開にはアレレ……。自分が警官だからといって、前科者の兄クリス
を自分の家に同居させることに反対する警察上層部の考え方は、受け入れられない。しか
し、フランクがヴァネッサにチョッカイを出すのは男としてはもちろん、警官としても問
題ありなのでは……？

兄は前科者、弟は警官と立場は大きく違っても、女癖の悪さは2人とも共通……。も
っとも、これは2人の父親レオン (ジェームズ・カーン) の女癖の悪さを受け継いだも
の……？

■□■このファミリーのこのクリスマスは虚構！■□■

クリスとフランクは父親は同じだが、母親は違うらしい。そして、父親レオンの説明に
よると、フランクの母親はどうにも出来が悪かったため、フランクが小さい頃に追い出
したそうだ。したがって、レオンは小さい頃のフランクに対してあまり良い印象を持って
いなかったらしい。しかも、クリスとフランクは年が離れているから、小さい頃は盗みでも
何でも悪事OKだったガキ大将クリスに対して、せいぜい見張り役しかできないフランク
という役割分担だったらしい。ところがある日、「危険が迫れば、ドアを3回ノックして知
らせろ」と言われていたのに、フランクは自分だけ逃げだして見張りの役割を果たさな
かったため、クリスははじめて前科者
になってしまったから、そこからこの兄
弟の確執が始まったようだ。

ギョーム・カネの脚本はそんな2人
の確執と、父親の仲介による手探りの
和解の姿を描いていくが、どう見ても
それは難しそうだ。このファミリーが
幸せの絶頂を迎えるのは、クリスが復
活させた悪業によって稼いだカネで



© 2013 - copyright : Les Productions du Trésor - Caneo Films

ナタリーとの結婚を実現し、他方、フランクもスカルフォを刑務所にぶち込んだ後の強引な口説きで、ヴァネッサを家に招き入れたことによって実現したファミリー揃ってのクリスマスイブ。そこでは、クリスから提供された豪華なプレゼントにレオンが大喜ぶするシーンも登場するが、こんなクリスマスのお楽しみが虚構であることは明らかだ。したがって、そこに警官たちが家宅捜索とクリスの任意同行を求めるためにやってくると・・・。



© 2013 - copyright : Les Productions du Trésor - Canéo Films

クリスはナタリーに対して、「何も心配することはない。すぐに戻ってくる」と言ったが、どう見てもそれは気休めでは・・・。
むしろ、スカルフォがフランクによる逮捕に異議を申し立て、妻のヴァネッサに対して「何も心配するな」と言っていた方に信憑性があるのでは・・・。刑務所に入っているスカルフォとの面会に赴いたヴァネッサは、フランクとの仲の修復については何も言わないまま、「離婚したい」と切り出したから、スカルフォがこれに激高したのは当然。さらに、釈放されたスカルフォがフランクの家を訪れ、ヴァネッサと子供を引き戻そうとしたのも当然だから、クリスの事情聴取の危機に続いて、フランクにも大きな危機がやってくることに・・・。

■□■強盗犯はやっぱり？フランクの2つの選択に注目！■□■

クリスのワルぶりは子供の頃からだから、年季が入っている。したがって、ウラの筋からはその能力を買われているから、昔馴染みのルイスの誘いに乗って一度悪事に手を染めてしまえば、その手の注文が次々と・・・。日本では、1968年の「三億円強奪事件」の犯人がわからないまま遂に時効を迎えたが、さて、クリスが断行した現金輸送車からの現金強奪作戦は？

銀行の前での現金の積み込み時に犯行が決行される。そう踏んだ警察はそのための万全の措置をとったが、クリスたちが立てた作戦はそうではなかったらしい。まんまとウラをかかれた警官たちはその場を引き揚げようとしたが、そこでクリスの姿らしきものを見たフランクは上層部の命令を無視してこれを追跡。すると、フランクの目の前で展開されたのは、偽装警官たちとクリスたちが結託した、現金輸送車からの現金強奪作戦だった。その一部始終を見守っていたフランクは、頃合いを見計らってクリスらしき犯人を強襲し、後ろから撃った拳銃の弾は見事に犯人の右肩に一発命中。そして遂に犯人を追い詰めたが、マスクに覆われた顔の中で憎々しげに見開いている目を見れば、こりゃどうみてもクリス・・・？さあそこで、警官として犯人を追い詰めたフランクがとった選択は？

さらに、大量の現金強奪作戦阻止の失敗の責任は警察上層部にあるはずだが、あの現場

での最終処理ばかりが問題とされ、周りから白い目でみられるようになったフランクの決断は、拳銃と警官のバッジを返すという決断だった。「君の実力は買っている」とその撤回を迫る上司に対して、フランクが述べた理由は「こんな嫌な雰囲気気の警察組織の中で、犯人逮捕の情熱を燃やすことができなくなった」ということだが、さてその本音は・・・？

■ラストはいかにもフランス映画的な美学に！■

『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）では、主役として素晴らしい演技力をみせたフランスの女優マリオン・コティヤール（『シネマルーム16』88頁参照）は、『エヴァの告白』（13年）（『シネマルーム32』68頁参照）でも薄幸なヒロイン（の姉）を演じたが、本作ではクリスのバカな妻という脇役に甘んじている。他方、『ブラック・スワン』（10年）（『シネマルーム26』22頁参照）でナタリー・ポートマンに対抗する美女ぶりを見せた、ナタリー役のミラ・クニスも、さらに黒人女性というヴァネッサ役を演じたゾーイ・サルダナも、男2人を全面に押し出した本作では、あくまで脇役に甘んじたのは仕方ない。

本作の後半以降は、刑務所から出てきたスカルフォがフランクの周りをうろつくストーリーが急浮上し、その問題が風雲急を告げてきそうだ。そんな中、クリスが男気を出して（？）顔見知りのスカルフォを散々痛めつけたうえ、「二度と俺の弟に手を出すな、弟に手出ししたら、今度は殺す！」と脅しつけたが、そんなことでコトは解決するの？スカルフォの立場からすれば、自分が刑務所に入っている間に、自分を逮捕した警官のフランクが妻を寝取ったのだから、怒るのは当然。フランクとヴァネッサは誠意を尽くしてスカルフォに謝罪すべきなのに、このやり方は如何なもの…。もちろん、スカルフォの反撃の可能性はクリスも承知しているから、このままスカルフォを釈放するつもりはなかったが、そこでフランクがしばらく身を隠すための手順を喋ったのは大チョンボだ。

モニカにやらせている大規模な売春宿の資金がクリスから出され、実質オーナーがクリスであることを、ついにモニカが自白。そしてそこから、現金輸送車の現金強奪犯もクリスだということが、やっと判明。しかし、警察はクリスの逮捕に向かったが、他方、拘束状態を逃れたスカルフォはフランクへの報復に向かうことに……。さあ、そんな中、クリスはいかなる行動を？警察の追跡から逃れることと、スカルフォを追跡することの両立はできるの？そんなラストに向かって、いかにもフランス映画的な美学を、しっかり見届けたい。



© 2013 - copyright : Les Productions du Trésor - Caneo Films